

## 『給食の力』

東京都江戸川区立下鎌田小学校 六年一組 男子 峯 鼓太郎

僕が住んでいる東京都江戸川区には、小松川という地名がある。その小松川付近で発祥し、江戸時代から栽培され続けている野菜が小松菜だ。江戸川区の学校では、この特産品の小松菜を使って給食を作っている。僕の通う小学校でも、毎日のように給食で小松菜を使った献立が出されている。

社会科見学で、学校の近くの小松菜畑を見に行ったことがある。意外に思う人もいるかもしれないが、東京にもちゃんと畑があり、そこで作られた物が給食に使われている。

五年生のとき、授業で「地産地消」という言葉を習った。地域で作られたものを、その地域で消費するという意味だそうだが、僕の学校では、それを給食を通して実践していると言える。この言葉を給食にあてはめると、さらに違った意味が見えてくる。

給食の良いところは、クラスみんなで同じ物を食べられるということだ。人は共通の体験を積み重ねることで次第に仲間意識が高まり、絆が深まっていくものだと思う。しかもそれが、地域で作られた食材を使った給食ならばなおさらだ。それは、自分たちがこの地域で生まれ育ったことの一つの証でもある。

地元で育てられたものを、同じ地元で育った仲間たちと一緒に食べる。これが僕にとっての「地産地消」の意味だ。

僕たちはもうすぐ中学生になり、別の中学に通うことになる友だちもいる。高校や大学に進学し、やがて社会に出ればもっと離れ離れになっていくことだろう。でも、給食の時間にかみしめた共通の思い出は、いつまでも僕たちの心に残っていく。

給食を食べるときはいつも、友だちと話しながら食べているが、ごく普通の話題でもみんなと一緒に食事をしながら話すとても楽しいものになる。小学校生活を振り返ってみると、給食で出されたものやそのときの出来事は、特に楽しい記憶として鮮明に残っている。それは、給食の時間が学校の活動の中で唯一「生きること」に直接つながっているからだと思う。食べることは生きることだ。そして、その時間にクラスの仲間と交わしたたわいもない会話も、楽しかった記憶も、僕がこれから生きていく糧となる。給食にはそんな力があると思う。

江戸川区発祥の小松菜は、現在では関東地方を中心に広く栽培され、全国に出荷されている。今ではどこにいても食べられる野菜だ。僕が大人になったとき、どこでどんな風に暮らしているかは分からないが、一つだけ確かなことは、僕が大人になっても小松菜を食べているということだ。そしてきっと、小松菜を食べるたびに思い出さだろう。友だちのこと、学校のこと、生まれ育った故郷のことを。おいしかった給食の味と共にいつまでも思い出さだろう。